

古代の王権と *várcas*

土 山 泰 弘

[1] ヴェーダ文献にみられる王権は、複合的に発達した王権儀礼とそれをめぐる高度に洗練された諸観念を特質とするが、それは主としてブラーフマナやそれを補助するシュラウタ・スートラに特徴的であって、初期のヴェーダすなわチリグ・ヴェーダ (=RV) およびアタルヴァ・ヴェーダ (=AV) においては王権に関して知るところは少ない¹⁾。しかしその数少ない資料の中でも、例えば AV. 4. 8 は貴重なものの一つであって、初期の即位儀礼の実際を推測するうえで評価すべき資料であり、また当時の王権観念を知るうえでも重要な意味を持つ。このうち前者の即位儀礼の儀軌については既に扱ったことがあるので²⁾、本稿では王権の観念的な側面について検討を加えたい。この讃歌の灌頂に関する詩節³⁾の中で次のように言われる。

「虚空あるいはまた地上にて乳 (*páyas*) を愉しむ天上の水 (*divyá- ápas-*)、それらすべての水の *várcas* をもって、汝に対して私は灌ぎかける。」「天上の水、乳に富む (水) (*páyasvatī-*) は汝に対して *várcas* をもって灌ぎかけた。サヴィトリは汝を友誼を育む者となさんことを。」(AV. 4. 8. 5, 6)

この詩節のなかで二つの観念に注目したい。第一は王に灌頂水をそそぐ行為を、水の *várcas* を王に付与すると意味づけること。第二は王に *várcas* を与える灌頂水が「乳」(*páyas*) を有する天上の水 (*divyá- ápas-*) とされることである。本稿ではこの二点を出発点にして王権の問題を考察するのであるが、その前に *várcas* の語の意味内容について概観しておきたい。

várcas はリグ・ヴェーダにおいては主としてアグニと太陽に関わり⁴⁾、アタルヴァ・ヴェーダではこれに加えて、上に引用した王の権威、さらに水あるいは天上の水、女性に関連し、敵対者より奪うべき対象ともなる。またしばしば他の諸力とともに列挙されるが⁵⁾、その場合生命の力と関わりが顕著である⁶⁾。ちなみに *-as* で終わる中性名詞は力との類比 (*magische Kraft, Daseinsmacht*) によって理解されるが、それは事物の性質を表すとともに事物それ自体としても扱われ、さらにそれは他に対して作用する力をもつという呪術的な思惟の性質をあらわして

いる¹⁹⁾。ここにとりあげた várcaas もその例外ではなく、王を王たらしめる力の一つとして理解できる²⁰⁾。この語の用例は多様な意味の拡がりを示すが、本稿では王が身につける várcaas の内容を、これら様々な意味との連関をたどりながら検討を加え、ヴェーダ初期の王権観念の一面を明らかにしたい。

[2] [1]で第一の点としてあげた、王が várcaas を保持するという考えは一つの定型化された観念として他にも見出すことができる。例えば王を称えて「神サザヤトリ、アグニは (várcaas をもって) 汝を包むべし。ミトラ・ヴァルナは várcaas をもって汝を (包むべし)。すべての敵意を踏みつけて、来たれ。汝は敬びに満ちて、これなる王国 (raṣṭrā) を創った。」(AV. 13. 1. 20) 王の成功を祈願して「この王をして諸部族の部族長 (vispāti) たらしめよ。彼に、イソドラよ、偉大なる栄光 [várcaas] を与えよ。彼の敵を栄光なきものとせよ」(AV. 4. 22. 3. 辻直四郎訳²¹⁾)、バラモンを迫害する王を呪詛して「彼 (バラモン) は [よく] 王権 [ksatrá] を奪い、栄光 [várcaas] を滅す²²⁾。」(AV. 5. 18. 4a. 辻訳)

このように várcaas は王の有する権威の一つであり、raṣṭrā や ksatrá など王権を表す語に関連して言及されるのであるが、それがさきの AV. 4. 8. 5 および 6 では即位式の灌頂に際して王に与えられるのである。

また第二の点としてあげた、王に与えられる várcaas が天上の水に由来するという観念もまた他の詩節にみられる。例えばバルナの護符 (paṇa mañi) に王の繁栄を祈って「神々の力 (ojas), 植物の乳 (páyas) (=バルナの護符) は, várcaas をもって怠りなく私に力を与えよ。」「バルナの護符よ、私に主権 (ksatrá) を、私に富 (rayi) を定めるべし。私は王国 (raṣṭrā) の領域で堅固、最高とならんことを。」(AV. 3. 5. 1cd. 2) 「乳」(páyas) は天上の水と同義に用いられて、ともに生命を与え生命を育む力を表すことがある¹⁹⁾。また várcaas が水あるいは乳に由来するというのも一般的な観念である²³⁾。したがっていま引用した詩節で植物の「乳」が王権の várcaas を有するとされるのは、冒頭の AV. 4. 8. 5 および 6 で天上の水に várcaas が由来するというのと同じ観念である。

このように王が天上の水に由来する várcaas を保持するというのは確立した観念とみることができよう。

[3] とくろで水に火が存在するという観念はヴェーダでは普遍的であって¹⁹⁾、王権の várcaas が由来する水の中にも火が存在する。また火は天に在っては太陽 (súrya, ādityá) と同一視される¹⁹⁾から、天上の水に存在する太陽によって王の権威を支持することがある¹⁹⁾。前者の例として「水に存在する (apsausád-) 吉祥なる

火を我々は呼ぶ。聖なる (deví) よ、汝は私に王権 (ksatrá), várcaas を定めおくべし。」(AV. 16. 1. 13) 後者の例としては Rohita (太陽) の歌として知られる讃歌の中で「昇れ北馬 [太陽] よ、水の中にある汝は。この賜物に富む王国 [raṣṭrā] に入れ。この万有をうみしローヒタ [太陽] が、よき支持ある汝 (国王) を、主権 [ksatrá] のために支持せんことを。」(AV. 13. 1. 1 辻訳)¹⁹⁾

つまり王権の várcaas の由来を天上の水だけでなく、水に存在する火あるいは太陽に関係づける。ここでとりわけ注目されるのは太陽との関わりである。一般に várcaas は直接に太陽に由来する力でもあるから¹⁹⁾、同様の思考が王権の várcaas に関してもなされる。例えばさきの Rohita の歌の中で, Róhni (曙) について「ローヒタに従順なるローヒニは、寛裕にして色うるわしく、高らかにして光彩に富む (suvárcaas-)。」(AV. 13. 1. 22ab 辻訳) といわれて、王権の várcaas は直ちに太陽の光り輝く力を表す¹⁹⁾。また王を選定する祈願の中で「王国はながもとに来たり。栄光もて立ちあがれ [あるいは「昇れ」 sahá várcaasód ihí]。前進して汝は、人民の主として、独一の王者として支配せよ (vi raja 或いは「輝け」) (AV. 3. 4. 1. ab, 辻訳) というが、類似の表現が直接に太陽を称える詩節の中で用いられる。「昇れ (úd ihí), 昇れ、太陽よ。光輝もて我が上に昇れ (várcaasā mahy úd ihí)。」(AV. 17. 1. 6ab, 7ab) すなわち王の有する várcaas は太陽に由来する várcaas であり, várcaas を有する王に光り輝きつつ昇る太陽の姿を重ねあわせているのである¹⁹⁾。ちなみに神界の王イソドラは太陽とともに várcaas を共有する。「汝 (太陽) はまさにイソドラとともに現れんことを。恐れることなく共に来たりつつ、敬びつつ、同じ várcaas (samāvárcaas) を有しつつ。」(RV. 1. 6. 7)

このように王権の várcaas が火または太陽に由来するという観念が確認されるが、かかる太陽との結びつきに王権観念の一特質を知ることができる。

[4] 以上みてきたように、王が身につけるべき威力としての várcaas は、その由来を天上の水あるいは水に存在する太陽 (火) の光り輝く力にもとめることができるが、それではどのような関連からみた várcaas のもたらす内容は何であろうか。ヴェーダでは水も太陽も、万物に生命を与え生命を養い育む力と考えられており、一方の várcaas 自身も [1] で述べたように生命の力との関わりが顕著である。以下に várcaas が関わる生命の力の具体的内容を幾つか例示する。「(この者を) 包むべし。我々のためにこの者に várcaas を定めおくべし。この者を老齢による死 (jānāmyu), 長寿 (dirghá-āyus-) となすべし。」(AV. 2. 13. 2ab) 「汝 (アグニ) はこの者に várcaas を付与せよ、そして子孫 (prañā) を多となせ。」(AV. 6. 5. 1cd)

「アグニよ、私に várcaas を付与せよ、子孫、長寿 (āyus) を (私に) 付与せよ。」 (AV. 7. 89. 2ab)²⁰⁾

したがって várcaas が天上の水あるいは太陽に由来せしめられるとき、関連する表象はかかる生命を与え生命を育む力であるうと考えられる。すなわち灌頂儀礼で王に対して várcaas の名のもとに与えられるのは、天上の水あるいは太陽が有する万物に生命を与え生命を養い育む力である。

[4] 以上をまとめると、várcaas は王がその身に帯びる威力の一つであり、即位式の灌頂儀礼で灌頂水を通じて王を王たらしめる力であるが、かかる várcaas の由来を見ると天上の水あるいは水に存在する太陽 (火) の光り輝く力観念に深く関わり、そのもたらす内容は万物に生命を与え生命を育む力である。かかるものとして várcaas はヴェーダ初期の王権観念の一つの側面を構成していることが明らかである。これを王権論一般からみるならば、王が várcaas を介して天上の水あるいは水に存する光り輝く太陽 (火) の生命力にあずかることをさして、そこに世界を支持する王という一種の宇宙論的な性格をよみとすることは可能である²¹⁾。本稿冒頭で述べたように初期ヴェーダにおいて王権に関する言及は多くないが、王権はその当初からかかる神聖な価値が与えられているのであって、後代における王権観念の発展の端緒を認めることが出来る。

1) RV, AV の両文献をベースにした王権観念の研究は例えば、B. Schlerath, *Das Königtum in Rig- und Atharvaveda* (Wiesbaden, 1960) しかし文献の性格を反映して神界の王権に関する研究が主体であり、本稿で扱う世俗の王の権威に関わる資料は限定されている。

2) 拙稿『『アタルヴェン・ヴェーダ』の即位儀礼 | AV. 4. 8-1, 『印度哲学仏教学』第3号, 昭和63年 pp. 155-169

3) 前掲拙稿 pp. 164-165

4) H. Grassmann, *Wörterbuch zum Rig-veda* (Wiesbaden, 1976²⁾, p. 1222

5) e. g. AV. 9. 1. 17cd (téjas, bala, ójas), 10. 5. 36d (téjas prāṇā āyus), 19. 37. 1ab (śāhas, ójas, bala)

6) 本稿は王権と várcaas との関わりを主題とするため、várcaas それ自身の詳細について別の機会に譲り (『印度哲学仏教学』第5号掲載予定)、いまは該当する注において原典箇所を指示するにとどめる。

7) J. Gonda, *Ancient-Indian ójas, Latin augus and the Indo-European nouns in -es-/os* (Utrecht, 1952), pp. 46-57

8) J. Gonda, op. cit., p. 50

9) 辻直四郎『アタルヴェン・ヴェーダ讃歌』, 岩波文庫, 1979 なお辻直四郎訳の引用に際しては、引用者による補足は〔 〕を用い、訳者による補足は区別した。

10) várcaas は敵対者より奪うべき力とされる。AV. 4. 22. 3, 7. 13. 1, 2, 114. 1, 19. 33. 5, 36. 1, 49. 4, RV. 10. 159. 5

11) AV. 4. 15. 6, 6. 124. 1, 7. 89. 1, 8. 2. 14, 18. 3. 56, 19. 33. 1, RV の páyas については H. Grassmann, op. cit., pp. 773-774

12) AV. 6. 68. 2, 7. 89. 1, 10. 5. 7-14, 10. 6. 8, 12. 1. 7, 8, 14. 1. 35, 36, cf. 10. 6. 8 (soma), 12. 1. 7, 9 (mádhvu)

13) AV. 5. 3. 1, 7. 89. 1, 19. 33. 1, RV. 3. 22. 2, 3. 24. 1, 6. 13. 2, 9. 66. 21, 10. 9. 9, 128. 1, 140. 2, H. Oldenberg, *Die Religion des Veda* (Darmstadt, 1970³⁾, pp. 112-116

14) H. Oldenberg, op. cit., pp. 108-111

15) AV. 1. 4. 2, 3

16) 他に AV. 13. 1. 2, 5

17) AV. 3. 22. 4, 19. 26. 2, 13. 1. 22. 3, 16. 17. 1, 6. 7, 27, 28, 19. 26. 2, 3, RV. 1. 6. 7, 6. 58. 4, 10. 112. 3

18) várcaas を有する女性に言及される場合がある。AV. 1. 17. 1, 12. 1. 25, 14. 1. 35, 36, 2. 18, 29, 53, RV. 1. 6. 7, 6. 58. 4, 10. 112. 3, 159. 5

19) 同様の表現は AV. 3. 20. 10b にも見えるが、ここではアグニが太陽のイメージで語られる。

20) AV. 2. 29. 1, 14. 1. 47, 19. 26. 2

21) cf. J. Gonda, *Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View* (Leiden, 1966), p. 69

<キローフ> 王権, 灌頂, 太陽, 水, várcaas

(駒沢大学北海道教養部非常勤講師)

新刊紹介
庵谷行享著

『日蓮聖人教学の基礎 一, 二』

A 5 判・73頁, 170頁

875円, 999円 (税込み)

山喜房仏書林

平成元年9月12日, 11月11日刊